PROGRAM NOTES

曲目解説：東端哲也

ハイドン：弦楽四重奏曲 ハ長調 Op.74-1 Hob.Ⅲ:72

オーストリアの片田舎に生まれたフランツ・ヨーゼフ・ハイドン（1732-1809）は“交響曲の父”と呼ばれる古典派を代表する作曲家だが、本格的な弦楽四重奏曲という形態の音楽形式を確立した業績も大きい。彼は交響曲の場合と同じように四楽章制のスタイルをこのジャンルに導入し、ソナタ形式を効果的に用いることによって完成度の高い弦楽四重奏曲を数多書き上げた。それらが後世の作曲家たちに与えた影響は大きく、数々の名曲を生み出す原動力となったのは言うまでもない。さて、1761年に西部ハンガリー有数の大貴族エステルハージ家の副楽長という職を得たハイドンは1766年には楽長に昇進。ウィーンから約50キロもはなれた田舎町にある同家の居城で実に30年近くもの間働き続けたが、しかしそんな場所にいても、長年の間に彼の名声はヨーロッパ各地に広まり、その作品はパリやアムステルダム、ロンドンでも出版され、1785年頃にはフランスやスペインから作曲の委嘱を受けていた。1790年にエステルハージ家のニコラウス侯爵が死去し、晴れて自由の身となったハイドンはウィーンに移り、この頃、彼を尊敬していたヴァイオリン奏者で興行師のザロモンからイギリスでの仕事をオファーされる。その内容はロンドンで新しい交響曲などを作曲して指揮するというもので、当時としてはかなり高額の報酬が約束されていた。こうしてハイドンのイギリス訪問は1791年～1792年と1794年～1795年の2度にわたって実施され、どちらも大成功を収めて彼に富と名声をもたらす。Op.71とOp.74の全6曲はウィーンの音楽好きの貴族に献呈されたもので、その伯爵の名をとって「アポーニー四重奏曲」と呼ばれ、このうちの何曲かは1794年にロンドンで行われたザロモン・コンサートで披露されたと言われている。Op.74-1も第1楽章から巨匠の名に恥じない傑作で、特に第3楽章では転調に予想外の動きがあるのも聴き所。第4楽章も多彩な技法を駆使したヴィヴァーチェ（活気のある演奏）で華やかにフィナーレを飾っている。

ヤナーチェク：弦楽四重奏曲第2番「ないしょの手紙」JW Ⅶ/13

現在のチェコ東部モラヴィア地方に生まれ、プラハのオルガン学校に通ったのち、ライプツィヒとウィーンの音楽院でも学んだレオシュ・ヤナーチェク（1854-1928）は1881年に地元ブルノに戻り、オルガン学校を設立。モラヴィア民謡の採取を行ない、話し言葉の抑揚を巧みに取り入れた独自の作風を切り開いた。特にオペラ作品で知られ、モラヴィア方言で台本も

書かれた歌劇《イェヌーファ》が1916年にプラハで成功を収めて以降、歌劇《カーチャ・カバノヴァ》(1921年初演)、《利口な女狐の物語》(1924年初演)、歌劇《マクロプロス事件》(1926年初演)等が次々と生み出された。そうしたオペラに次いで重要なジャンルが室内楽であり、とりわけ晩年に書かれた2つの弦楽四重奏曲はそれぞれ独自の内容を持つユニークな作品として今なお世界的に愛好されている。実は当時ヤナーチェクには1917年に知り合った38歳も年下で(二人の子どもを持つ)既婚女性のカミラ・シュテスロヴァーという恋人がいた。40代で二人の子どもに先立たれ、妻との関係も冷え切っていた彼にとって明るい性格のカミラは、インスピレーションの源として創作を支えてくれるミューズであった。亡くなる半年ほど前に作曲された弦楽四重奏曲第2番も、一連のオペラと同じくカミラへの愛から生まれた作品で当初は「恋文」というタイトルであった(※実際、彼が彼女に宛てた手紙は600通以上にのぼるとか)。第1楽章ではカミラと初めて出会ったときの印象が、第2楽章では二人で旅行した温泉地での想い出が綴られ、第3楽章ではカミラへの甘美な憧れが、第4楽章では彼女を失う恐れや不安と共にヤナーチェク自身の生への執着が描かれている。

ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第9番 ハ長調 Op.59-3「ラズモフスキー第3番」

ウィーン古典派の形式を集大成し、王侯貴族のためだけでなく大衆に向けても自身の想いを芸術として謳いあげ、次の19世紀ロマン派音楽への扉を開いたルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)。生涯にわたって書かれた17もの弦楽四重奏曲(※単一楽章の独立した作品として出版された《大フーガ》変ロ長調 Op.133を含む)は、9つの交響曲や32曲のピアノ・ソナタと並ぶ3本柱のひとつで、音楽史上の“金字塔”。このうちOp.59の3曲は、ウィーンに大使として滞在していたロシア貴族の依頼によって1805〜1806年に書かれたもので、その伯爵の名前を冠した中期の傑作である。ボンで教育を受けて宮廷楽士として豊かな音楽経験を積み、22歳になる直前の1792年11月からウィーンに移ったベートーヴェンは、30歳で6曲の弦楽四重奏曲(Op.18)を書き上げ、その後難聴の悪化で2人の弟に宛てた有名な『ハイリゲンシュタットの遺書』をしたためるが、この危機を克服。当時は作曲家として充実期を迎えつつあった。この「ラズモフスキー」ツィクルスを締め括る第3番は、第1番と第2番の葛藤を乗り越えて一段上に突き抜けた、3曲のなかで最も明るく力強い作品で、演奏頻度もいちばん高い。第1楽章は曲全体に対して付けられたかのような長い序章で幕を開ける。第2楽章は極めて抒情的で、ややメランコリックな気分が流れる。第3楽章はスケルツォをおかず、グラツィオーゾ(優美に)と記した独自の諧謔に溢れたメヌエットが用いられている。そして切れ目なく続く第4楽章はフーガの技法を駆使して組みあげられた見事なフィナーレで、その躍動感と緊迫した動きは圧巻だ。